

〔発表要旨〕『三法度論』における教理の展開

林寺 正俊（北海道大学）

犢子部（あるいは犢子部系の部派）に属すると推定される『三法度論』は、インド語の原典やチベット訳がなく、二種の漢訳によって伝えられている論書である。一つは廬山の慧遠（334～417）が罽賓出身の僧伽提婆（Saṅghadeva）に要請して紀元 391 年に漢訳させたもので、それがこの『三法度論』の名で知られるテキストであり、もう一つはこの訳出に先立つ紀元 382 年に慧遠の師にあたる道安（312～385）が鳩摩羅仏提（Kumārabuddhi）らに要請して訳させたものである。後者は『四阿含暮抄解』という名で知られるが、これは四阿含の要義が本書中にまとめられているとする伝承を踏まえて、道安が敢えてそう名付けたものであり、実際には中の各品末尾に「三法度」という本来の名称も挙げられている。

本書は、ヴァスバドラ（Vasubhadra）作の簡潔な「三法度経」と、それに対するサンガセーナ（Saṅghasena）作の注釈（論）から成る。『四阿含暮抄解』では本文中に「修妬路」（sūtra）という割注が都度に挿入されて両者が区別されており、『三法度論』では日本古写経本が「経」だけを冒頭に別出して両者を区別している（ただし、版本はその別出部分を欠いているので、本文中の経と論とを区別しにくい）。

本書の大きな特色は、教理を解釈する際に三分法を用いる点にある。つまり、或る教理を解釈する際にその内容が 3 項目によって説明され、さらにまたそこに挙げられた 3 項目のそれぞれが別の 3 項目によって説明されるという具合に、三分法によって教理が順次に枝分かれするように解釈されていくのである。具体的に言うと、まず本書の名称でもあり、かつ本書構成の大枠ともなっている「三法」とは、徳（およそ善なること）・悪（悪なること）・依（徳と悪の依り所）のことをいうが、この徳・悪・依の内容が、例えば「徳とは施・戒・修である」というように 3 項目を挙げて解釈され、さらにここに挙げられた「施」などの 3 項目の各々もまた別の 3 項目によって解釈され、そこから先の項目についても基本的にはこうした三分法的な解釈がなされるのである。

原始仏教以来の教理には三宝、三毒、三界など 3 を基準にまとめられるものが確かに多くみとめられるけれども、四聖諦や五蘊などのように、すべての教理がそうであるわけではない。しかしながら、本書ではそのような教理の幾つかについても敢えて三分法を適用して解釈しようとする傾向が見られるのである。

本発表では、本書が 3 を基準に据えている理由までは十分に解明し得ないが、三分法に基づく教理解釈の独特の仕方とそれに関連する問題点について検討し、それによって本書における教理展開の特色について考察する。

〔キーワード〕 『三法度論』、三法（徳・悪・依）、三分法